

「歴代宝案」についての思い出：私の琉球史研究

小葉田, 淳 / KOBATA, Atsushi

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

16

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

12

(発行年 / Year)

1990-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002708>

「歴代宝案」についての思い出

——私の琉球史研究——

小葉田 淳

—

私は昭和五年四月に台北帝国大学文政学部へ赴任し、明代を中心とする日中交渉史を研究していたが、昭和十年三月下旬に沖縄を訪れた。それは「歴代宝案」という稀有な琉球の外交文書集が世に出たときいたからである。沖縄県立図書館でこれを閲覽し若干を筆録もした。

沖縄より帰台して間もなく私は「旧港及び其日琉両国との交渉に就いて」と題した論文をかいて「史林」二十卷三号（昭和十年七月）に発表した。

応永十五年（一四〇八）若狭に到着した南蛮船について新村出博士は旧港（パレンバン）の船であろうとされたが、私の先師三浦周行博士は大正十五年四月発表の「応永外寇の真相」の中で、爪哇

(ジャワ) 国船であると力説された。そのころ爪哇国使人が日本、朝鮮に來航したことの記事のある「李朝実録」によって、右の南蛮船は爪哇国船と推定されたのである。昭和七年八月鹿児島県志布志町で、阿多文書によって応永二十六年阿多領に漂着した南蛮船関係文書を発見紹介された高柳光寿氏も三浦博士の説を承けて、この南蛮船も爪哇船であろうとした。

ところが「歴代宝案」卷之四十三所収の宣徳三年(一四二八)拾月初五日付王相懷機より旧港管事官あての奉書によって、応永二十六年南九州漂着船は旧港の華僑頭目施智(済)孫の派遣船であることが確認され、また応永十五年若狭來着の南蛮船は済孫の父で旧港宣慰使施進卿の派遣船であることも確定できたのである。明では旧港宣慰司を設けて施進卿を宣慰使に補任したが、進卿は永楽十四年(一四一四)以後、同二十一年中までの間には没し、済孫の使が同二十二年正月には明に赴いて宣慰使の襲職を乞うていた。応永二十六年(永楽十七)南九州漂着船は宣慰使進卿の後継者たるべき済孫の派遣船である。おそらく、この時点で進卿は没していたのであるまいか。王相懷機の奉書があつた旧港管事官は旧港宣慰使を指し、当時の宣慰使は済孫のあと宣慰使を継いだ進卿の娘であつたようである。王相懷機の王相は長史などとともに、もと明の王相府(王府)の官職で、琉球政庁を王相府に準じて、明は琉球の使人に長史や王相を授けたりした。しかし懷機のころは王相は中山王府の執政官を意味するようになっていた。さて、琉球国王と朝鮮や南海諸国王との間の文書は、咨をもつてする。咨は同列同位にある官司間の連絡の公文書で、琉球国と明・清の礼部などの中央官庁、福建布政使司

などの地方官庁の往復文書も咨である。しかし、旧港管事官との往復文書には咨を用いず、執政官が国王の命を奉じて発する奉書によつたのである。

さて前述の奉書によると、応永二十八年九州官(九州探題)洪川道鎮(探題職は子の義俊が継いでいた)が旧港の施主烈智孫派遣の使者一行を琉球に送り旧港へ通送回国することを乞うたが、琉球は旧港との交渉がなかつたので暹羅(シヤム)へ送つて転送させることにした。そこで宣徳三年の十月旧港へ使者実達魯らを送り、転送の使者らの安着いかんを尋ねて、かつ今後の貿易を求めたのである。ただし、実達魯らは、同年九月二十四日付琉球国王の暹羅国あて咨文には、暹羅派遣の使者を命ぜられており、暹羅に赴いて、次いで旧港へ到つたのである。この転送の旧港の使者とは、南九州漂着船のそれで、九州探題から阿多氏あて博多への廻送を督促しており、応永二十七年三月阿多領を出帆し博多へ向つたが、博多到着前後に難船したらしい。この使者転送を機縁に琉球、旧港間の交渉が開かれたのである。

私はなお続けて七月に「琉球満刺加間の通商関係に就いて」を起稿して、同年度の「経済史研究」十四卷第五・六号に発表した。

二

久米の人々の間に長年秘蔵されてきた「歴代宝案」は、昭和八年十一月に烏袋全発氏の斡旋もあつ

て沖縄県立図書館へ移管されることになった。「歴代宝案」一集の編集は康熙三十六年（一六九七）四月四日に始まり、十一月三十日完了し四十九本（一冊一巻）であった。そのうち逐次に二集、三集が編集された。さて移管にあたって、久米の長老と図書館長真境名安興氏が取り交した契約により、図書館では直ちに副本の作製に着手した。一集は主として桑江克英氏が筆写して、昭和十年春には終わっている。台北大学では久場政盛氏が筆写して昭和十一年内に一集を終え、つづいて二集、三集の写本を作製した。

鎌倉芳太郎氏は「歴代宝案」の図書館移管に先だち昭和八年八月天尊廟で青写真を撮り、私がかつて調査したところでは、一集分二六冊、二集その他若干冊があった。また東恩納寛惇氏は昭和七年暮れに同氏が南洋方面へ外遊するに先だち天尊廟内で「歴代宝案」を閲覧し、また鎌倉氏と前後して青写真を調製し、那覇の東恩納文庫には一集分二十数冊が存する。なお、東京大学史料編纂所では昭和十六年に沖縄県立図書館へ依頼して一集を筆写しており、主として一集分の写本はその他にも存するようでも所有している。このようにまず「歴代宝案」のうち注目されたのは一集であるが、一集に欠本も多く破損脱落した部分も少なくない。すでに図書館移管時の一集について、かつて私が推定したところでは、巻之三十四、三十八および巻之四十四乃至四十九の計八巻八冊を欠き、巻之四、十四が二冊ずつあってそのうち各一冊はとくに破損がはなはだしかった。すなわち冊数は四三であるが、実は四一巻を存したのである。

さて私は前述した二論文に次いで、昭和十一年四月「日本本土琉球間の経済的及び政治的關係に就いて」を執筆して「史学雑誌」四十八編第一・三・四号に載せた。同十二年五月「琉球明間の通交貿易」を脱稿したが、「歴代宝案」が「皇明実録」とともに主要な史料となっている。さらに同十三年八月「暹羅の東亜貿易の隆替と琉球貿易」を脱稿した。琉球が十六世紀中まで交渉を持った南海諸国は八カ国知られるが、そのうち暹羅との通交が最も早く始まり（一三八〇年代ころ）、また最も最後まで継続した（一五七〇年）。一四二五―一五七〇年の一四五五年間のうち、暹羅渡航の船数が最も多く、知られる船数五八隻を数える。一三八〇年より一五七〇年にいたる一九〇年間に、一六〇―一七〇隻の琉球船が南海諸国へ赴いたものと推定されるが、最後まで続いたのは暹羅一国であった。暹羅より琉球へ派遣された船は、十四世紀末より十五世紀初頭にかけて少なくなかったが、やがて減少し、あるいは絶えたらしい。「歴代宝案」が暹羅国関係でも唯一の基本史料となっている。以上の諸稿を併せて、昭和十四年九月日本評論社より「中世南島通交貿易史の研究」を出版した。本書はだいたい十六世紀末、琉球王世代でいえば尚永の代までをとりあつかっているが、琉明関係においてこれにつづく時代を記述した「近世初期の琉明関係」を添えて、昭和四十三年九月刀江書院より再刊した。この論文は台北帝大の「史学科研究年報」第七韓（昭和十七年六月刊）に収めたものである。

なお、伊藤忠太、鎌倉芳太郎共著昭和十二年刊の「南海古陶瓷」には琉球南海諸国間の往復文書を収載し、秋山謙蔵著昭和十四年四月刊の「日支交渉史研究」には一集より多くを引用して記述してい

る。東恩納氏は既述のように早く「歴代宝案」に着目されていたが、昭和十六年一月「黎明期の海外交通史」を刊行された。安里延氏は昭和十三年三月広島文理科大学史学科卒と聞くが、昭和十五年七月下旬第二回目の沖縄訪問のとき、私の宿舎に来訪し、熱心に琉球の南海諸国交渉の問題について所見を求められた記憶がある。翌十六年十一月「日本南方發展史」の好著を出版した。昭和三十五年秋、琉球大学へ出講したとき、安里氏が若くして物故されたとき、私は哀悼の情に堪えなかった。

戦後に、沖縄県立図書館蔵書の疎開先であった国頭の源河集落の付近より回収された「歴代宝案」九六冊は原本でなくて副本であった。原本は惜しくも戦災で完全に失われたのである。それで二集、三集をも含めて、その全容を最も原本に近い形で現在に伝えているのは、国立台湾大学所蔵の写本ということになろう。一九六二年（昭和三十七）に、右の写本が台北の中央研究院の手でマイクロフィルムに撮られて歴史語言研究所伝斯年図書館に保存されることになり、同年末より翌年春にかけて同じフィルムが数部製作されて、ワシントンの米国会図書館、ハワイ大学内東西センター、ハーバード大学燕京学院、ロンドン大学東洋アフリカ研究所、および東京東洋文庫、琉球大学等へ配布された。そのころ私はハワイ大学内東西センターで、琉球史、主として「歴代宝案」によって琉球の朝鮮および南海諸国との交渉史の研究に従事していたが、その経緯は後述する。こうして「歴代宝案」は極く一部に過ぎぬが世界の東洋学研究者に知られるようになった。一九七二年に台湾大学よりその所蔵写本は一五冊本として影印発行された。

三

一九六〇年米国会庫よりの支出経費で、ハワイ大学内に東西センター East West Center が設立され、アジア、太平洋地域と米国の人々の相互の協力理解を進め深めるを目標とした。その事業の一に高等研究所 Advanced Projects があり、ここでは招聘学者や指導者等による各種学術の研究調査や会議が行われ、その結果を広く普及することを目的とし、そのため英語やアジア・太平洋地域の語に翻訳し、あるいは出版に対する援助をも考慮された。

さて、そのプロジェクトの一として琉球史がとりあげられたが、私は招聘をうけて、一九六二年九月一日より翌年六月三十日まで一〇カ月の契約で、九月五日にホノルルに赴いた。東西センターの琉球史の研究室には、すでに知名の琉球史家比嘉春潮氏や台湾から広東十三行考の著者梁嘉彬氏が着任していた。ハワイ大学教授で日本史担当、琉球史研究者の坂巻駿三氏、同じく日本史の教授で高等研究部翻訳課長篠田実氏や梁氏らとも相談の結果は、私は「歴代宝案」について研究調査を担当することになった。まず、その解説を試み、論稿は京都へ送ったが、「歴代宝案について」の題で、「史林」四六巻第四号（一九六三年七月）に掲載された。つづいて「歴代宝案」一集の三九之巻より四三之巻までの琉球と朝鮮および南海八カ国との往復文書計一二七通を日本文訳し、解説と注記を付することとし、研究翻訳の助手沖縄出身の松田貢君がその英訳を担当することになった。十月末より日本文訳に

かかり、十二月中旬にいちおうこれを終えた。翌年二月に入り琉球・朝鮮関係の部より解説注記に着手した。「琉球・朝鮮の関係について」の論考は、この解説等を布衍して三月中旬にかきあげたもので、同年十月刊行の「田山方南華甲記念論文集」に投じた。先きの「歴代宝案について」とともに、多少補筆して昭和五十三年刊「日本経済史の研究」に収めている。

さて、注記にはすこぶる困難なものがあつて、産物名や、人名、役職等の比定には苦慮した。東南アジア諸国より招聘されあるいは留学する学者・有識者があり、その人々の助力をえたこともある。漢籍の利用引用は多かつたが、米国会図書館に一時預かつたと聞く北京図書館善本のマイクロフィルムを閲覧できたことは幸いであつた。こうして一九六三年六月の期限までに解説・注記を終えて、向う一カ年をかけて英訳を完了し、なるべくは東西センターにおいて出版することを希望し、七月に米本土へ向けて立ち、ヨーロッパを巡り八月末帰国したのである。

さて松田君の英訳文は、京大文学研究科国史専攻に在学中のドナルド・パートン君の手で補修し、一九六九年五月ハーバート燕京研究所よりの研究出版助成金を供与されて、京都河北印刷株式会社より印行された。書名は *Ryukyuan Relations with Korean and South Sea Countries, An Annotated Translation of Documents in the Reikidai Hoan* といい、第一章琉球・朝鮮の関係、以下は第二章が暹羅 Siam、第三章が満刺加 Malacca、第四章が旧港 Palembang、第五章が爪哇 Java、第六章が蘇門答刺 Sumatra、第七章が巡達 Sunda-Karapa、第八章が佛大泥 Patani、第九章が安南 Annam と、それぞれの琉球との関係を記

述した。はじめに、これら諸国と琉球との交渉経過の要旨、その時代の中国関係をも含めて諸国の歴史を概説し、次に琉球との往復文書を諸国についてそれぞれに年代順に英訳して、努めて詳細な注記を加えた。南海諸国物産名につき考証解説し、また用語解として人名・地名・贈答品名・役職名その他につき分類総括して記し、さらに引用文献を掲げた。

右九カ国との往復文書は、「歴代宝案」一集三九之巻より四二之巻に収載され、四三之巻に収めた分を加えて一二七通であるが、原本の失われた現在、東恩納文庫の青写真に拠つた写真版をもつて、各巻番号を付して本書の末に掲載した。この番号は、諸国関係の英訳往復文書に付した番号に該当する。三九之巻には「朝鮮国王咨」の題記があるが、収載分は朝鮮国王咨は一〇通で、暹羅国王咨六通、満刺加国王咨六通、他に暹羅國長史奉文二通がある。四〇之巻は「国王咨」と題記し、暹羅あて二五通、朝鮮あて一通、爪哇あて四通、それぞれの国王または国とあてた琉球国王咨を収む。四一之巻は「国王移諸国之咨」と題記し、前巻の咨の年代に次いで、満刺加あて一〇通、蘇門答刺あて三通、暹羅あて五通、朝鮮あて八通、これら諸国あて琉球国王または世子の咨を収む。四二之巻は「移葬執照」の題記があり、執照は渡航船に付与した渡航証明書である。旧港一通、暹羅二通、満刺加三通、安南五通、巡達二通、佛大泥八通、それぞれの諸国渡航船付与の執照を収む。四三之巻は「山南王併懐機文稿」の題記があつて、王相懐機が旧港の管事官、またその一類の頭目等にあてた奉書九通を掲出した。

松田貢君は私の日本文原稿を英訳するにみなみな苦心を重ねられたと想像するが、これに關連する研究をも進めて、一九六四年一月に、英文で十四、五世紀における東南アジアと中国の關係の一研究として「ジャバと中国人」の論文をかにて私に送られた。やがて松田君は沖繩へ帰り、琉球大學へも出講したようである。前述の書の印行成ると、私は早速これを沖繩の松田君の許へ届けた。ところがそれより半歳後、一九七〇年二月松田君の母堂よりの航空便で、同君は昨年十一月十四日入院、翌日手術、そして本年一月四日没したことを報ぜられた。松田君のごとき有為の前途ある学究が、若くして逝かれたことは悼しみても余りあることであつた。

さて右の書は、燕京研究所の研究助成の選考にあつた東方学研究会の關係方面のほか、若干の部数を欧米の東洋学研究所の施設のある大学、研究所へ頒布寄贈した。また少数数ではあるが欧米の大学などより注文を受けた。一九七五年（昭和五〇）沖繩本部半島で国際海洋博覧会が開催されることになつたが、これを東南アジア諸国に広報するにあたり、しかるべき大学、研究所に配布するというので、高良倉吉君が拙宅を訪れて、右の書をいく冊かを求められた。同年十月高良君からの便りによると、マレーシア国立大学のアビイティン教授より右の書を贈られた感銘した旨の書信があつたという。また同年三月末の日付でタイ国バンコク的美術局の総長ソンポップ・ピロムヤ氏 Sompop Pitomya より次のような要望書をうけた。それは、右の書を読むに、所収文書は価値高き史料であり、タイと諸外国との關係史の研究を發展させるもので、自局の定期刊行物にタイ語に訳して

載せたく、とくに第二章すなわち琉球・シャム關係はタイ語に訳し出版したく、その了承を乞うというのである。私はもとよりこれを承諾して返酬したが、その後いかが処置されたかは知らぬ。ところが一九八七年九月初旬に、日タイ修好一〇〇周年記念事業の一として、東京の国際文化会館において「日タイ交渉史をめぐる史料」と題する研究ワークショップが行われた。両国の研究者が、日タイ交渉史関連の史料に関する研究成果を持ち寄り情報を交換して、今後の研究を促進させる契機ともしたいという目的からである。私は、十四世紀末より十六世紀末までの日タイ交渉史料について述べ、最も重要な史料として「歴代宝案」について説明した。タイのタマサート大学副学長で外交史の専門学者であるチャーンウィット・カセツシリー氏 Charvit Kasetsiri は、琉球史料に対するコメントとして、アユチャ王朝の官営貿易は定説ではブラサートトン王治世下、すなわち一六三〇年以降に始まったとされたが「歴代宝案」によれば一四二五年乃至それ以前に明白な事例が存すると述べ、「小葉田氏の研究はタイ国内においてはこれまで知られなかつたが、東南アジア諸国の歴史を知る上で琉球史料は貴重な史料である。とくにタイ国にとっては大切なものである。」と結んだ。東南アジア諸国においては、十七世紀以後に成つた年代記類のほか、十六世紀以前の史料としては金石文や漢籍を除いては文献に乏しく、その時代の直接の文書として「歴代宝案」のごときは稀有のものといわねばならぬ。しかし、私の書による「歴代宝案」の紹介も、現在なお東南アジア諸国の学界において極めて限定された範囲のみ知られることを、更めて感じているのである。

追記 昨年八月沖繩タイムスの求めで「歴代宝案の思い出」を執筆した。本稿はそれに若干補筆し加減して、ハワイの東西センターにおいての作業の経過結果を付記したのである。かような蕪雑な文をもって責を塞ぐ仕儀となり、諒恕を乞うしだいである。